

図書館だからできる！顔が見える・繋がるコミュニティを目指して ～本×学び+コーヒー＝「創造的欠如」がひらく居心地の良い場づくり～

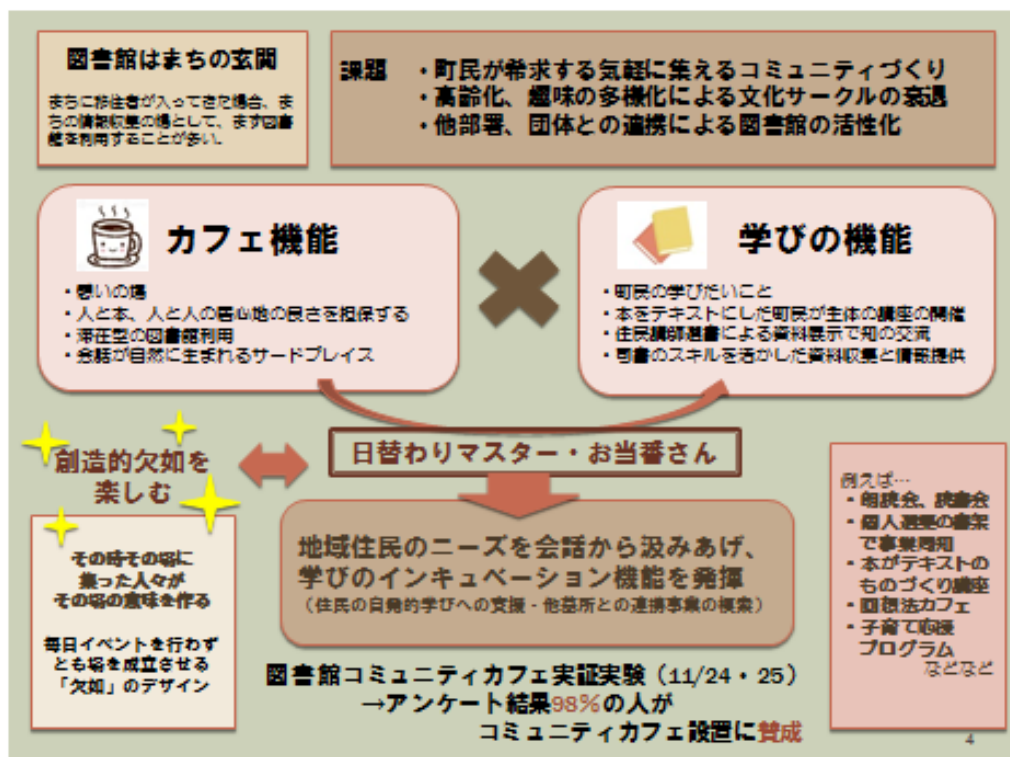
北海道滝上町 辻 めぐみ



1. はじめに

近年、岐阜県岐阜市のみんなの森メディアコスモス、東京都武蔵野市の武蔵野市立ひと・まち・情報創造館武蔵野プレイスなどカフェ機能も備えた地域活動の拠点、地域住民の新たな居場所としての公共施設が全国に数多く誕生している。レイ・オルデンバーグ (Ray Oldenburg) は^(注 1) 第一の家、第二の職場と共に人が豊かで幸福に生きるためには身近に居心地のよい公共的な場、第三の場が必要だと提唱している。高齢化、人口減少社会、単身世帯が増える現代社会では町内会活動がこれまでのように機能せず、人と人との繋がりを生み、人々の孤独を癒すプラットフォームの再建が大変重要になっている。

北海道滝上町は人口 2,679 人 (平成 29 年 10 月 31 日現在)、766.89 ㎥の広大な山林に囲まれた過疎の町であるが、美しくも厳しい自然環境ゆえであろうか、災害時も町内会が 3 時間以内に安否確認できる、停電時には 1 人暮らしのおばあちゃんが凍えてないか福祉職員が巡回する等、都会にはない温かな互助精神が残る。しかし、役場職員、林業関係者、福祉施設職員等の団体職員は町外からの転入者が多いため、濃密な人づきあいを煩わしく感じたり、そのやさしさを誤解したりすることもある。この町ならではの人の温もりを暮らしやすさに変換する装置として、年齢や性別、カテゴリーに拠らないコミュニティづくりが、転入者が土地に根を張るための仕組みとして焦眉の問題ではないかと常々感じてきた。何も図書館の新館を建設する町だけにとびきり心地のいい居場所ができるわけではない。スターバックスはやって来ないが、温かいコーヒーを飲みながら読書し、学びあい、地域活動の拠点となる環境が 2,700 人の過疎の町にあってもいいじゃないか。昭和 63 年建設の築 30 年となる文化センターの複合施設、正職員 1 名、臨時職員 1 名の図書館だつてとびきり居心地のよい場所になりたい…その憧れを込めて、このレポートでは図書館を地域住民が参画する新たな場として活用し、図書館のポテンシャルを活かした地域住民の学びを誘発するコミュニティカフェを提言する。図書館の現状とこれまでの取り組みを第 2 節で、第 3 節では先進事例から地域のコミュニティづくりについて学び、地域住民が主体となるボランティアスタッフの仕組みづくりとコミュニティカフェから派生する本×学びの事業について述べ、その詳細と実行のための仕組みについては第 4 節で説明する。



ポンチ図 提言内容

2. 人が集う場としての挑戦と失敗の試み

(1) 失敗事業を振り返る～ママ友会合 サービス・図書館サロン化計画～

	利用人数	貸出冊数	人口	人口一人当たり 貸出冊数
H18	11,326	22,982	3,316	6.93
H19	12,322	22,962	3,267	7.02
H20	11,879	21,964	3,235	6.78
H21	11,879	20,818	3,153	6.60
H22	11,280	18,366	3,073	5.97
H23	9,133	20,318	3,023	6.72
H24	9,240	20,374	2,960	6.88
H25	11,057	21,643	2,881	7.51
H26	9,942	18,675	2,823	6.61
H27	10,794	18,734	2,784	6.72
H28	11,264	22,348	2,694	8.29

表 1 滝上町図書館利用状況

滝上町図書館は蔵書が約 68,000 冊、床面積が 482 m²、年間資料費が 200 万円の小規模図書館である。利用状況は右の表 1 のとおりとなっている。課題としては多くの図書館でよく言われることだが、利用者の固定化、町民の本離れが挙げられる。

町に移住してきた人はまず情報収集の場として図書館を訪れることが多い。当館でも 4 月～5 月は初めて図書館へ足を運ぶ来館者が多く見受けられる。司書は利用者の読書傾向を探り、適切な本を紹介したいという思いから、カウンター業務やフロアワークで趣味や興味のある事柄について尋ねることがある。そのとき

「こんなスポーツのサークルがある」「吹奏楽団の練習はこの曜日にある」「英会話なら…」と学びの要望に応じた情報をマッチングすることも可能だ。このような情報と人をつなぐ役割を機能的に実施できないかとこれまで各種図書館事業を提案してきた。

教育委員会の育児支援事業で出会った母親に「ここでは大人のおむつは売っているけど、子どものおむつはどこで買えばいいの？」と問われたことがある。転勤で移住した知り合いのいない町で子育てするのはさぞ不安であろうと考案したのが平成 22 年度に企画したママ友会合サービスであった。図書館では飲食禁止のイメージが強いが、滝上町図書館では場所を限定して平成 14 年から飲食自由としていた。社会教育事業などに参加した母親を対象に図書館で使えるコーヒー券を配布して、ママ友づくりや交流の場になることを目指し実施した。ママ OG からは「いい企画だね！」との後押しを受けたが、事業参加者の顔ぶれがほぼ固定されていること、授乳中の母親はカフェイン入りのコーヒーが飲めないこと、そもそもママ友がいないママはいつ図書館に来たらママ友に会えるのかわからないなどママ友づくりをする場にまで発展することなく、残念ながらこの事業は軌道に乗らぬまま自然消滅してしまった。

平成 24 年には図書館サロン化計画を企画した。利用者の学びのニーズを汲み気軽に集い学べる場を作ることを目的として発案したが、社会教育事業と図書館事業の明確な差別化を図ることなく実施しようとしたことで実現にすら至らなかった事業である。

上記 2 事業は、図書館はカウンター業務やフロアワークから町民のニーズを掴むことができる場所だとの認識から、そのニーズを生かした学びの場を創造することで仲間づくりに繋がりたいと提案したものだが、どちらの事業もなぜ図書館で実施すべきなのかという点で手法が固まっていなかった。ママ友はカフェ機能の利用が一部の利用者のみ限定されてしまったこと、サロン化計画は既存団体への配慮が足りなかったという点において、内容を精査すべきであり、実施については時期尚早であったことは否めない。しかし、わが町の図書館利用者は司書の迷走をも容認する懐の深さがある。

(2) 大人だって学びたい～大人向け図書館事業で感じた手応え～

子どもたちが幼児期に出会う本には周りの大人が責任を持たなくてはならないとの思いで、これまで子どもや親子を対象とした読書普及事業を数多く展開してきたが、それと比較すると成人向けの事業は少なかった。そこで、子どもと一緒に大人も読書に親しみ図書館を利用するきっかけづくりとして、大人向けのテーマに絞り込んだ講演と資料展示を組み合わせた「おとなの図書館まつり」を開催し、今年で 5 回目となった。事業内容、参加者数は表 2 に示す。

この事業は日頃あまり図書館を利用しない 20～40 代の働き盛りの男性をターゲットに定め、町民の声を参考にしてテーマ設定を行った。

	事業内容	参加者数
平成 25 年度 第 1 回	「竹鶴政孝と北海道」ウイスキー講座	32 名
平成 26 年度 第 2 回	滝上産小麦でパスタに挑戦！イタリアン講習会	36 名
平成 27 年度 第 3 回	ビールは友だち！クラフトビール講座	38 名
平成 28 年度 第 4 回	日本酒講座 高砂酒造協力	32 名
平成 29 年度 第 5 回	ミントが薫るカクテルのタペ	31 名

表 2 滝上町図書館「おとなの図書館まつり」実施状況

アルコールをテーマにしたことで図書館を堅苦しい場所だと感じている町民にもアピールすることができた。同時にテーマに合わせた資料展示（北海道立図書館協力）を行い、今年度の事業では講座中に講師が資料を紹介するなどして図書館資料の利用促進にも繋がった。何よりも、この事業を継続するなかで、図書館利用者が自分の学びたいテーマを気軽に職員へ話してくれるようになったのが一番の収穫である。

（3）地域おこし協力隊による「憩いの場ひだまり」営業について

「地域おこし協力隊」制度は滝上町でも平成 26 年度から受け入れが始まり、現在も 4 名の隊員が体育施設、観光協会などで活躍している。その第 1 期に活動していた女性隊員が平成 27 年度から図書館の複合施設である文化センターのロビーホールの一画で始めたのが「憩いの場ひだまり」だ。コミュニティ活動に興味を持ち、使われていない町施設で食事の提供とイベントを展開していたが、施設に他の飲食店が入ることになり、文化センターに場所を移してセルフサービスで飲み物を提供していた。連日多くの地域住民が訪れ、彼女との会話を楽しんだ。年間来場者数は平成 27 年度が 2,827 名、平成 28 年度は 2,650 名を数えた。町民の持っている知識や技術を活かした「町民さんの知恵袋シリーズ」を月 1 回程度開催し、「楽トレ」「滝上 100 人女子会」等イベントも積極的に行っていた。任期終了が近づくと町民から継続を望む声が多く、行政もその声に応えたいと集落支援員制度を紹介する等奔走した。しかし、女性隊員自身が今後の人生を考えた時、期限がある仕事では将来に対する心許なさが拭えず泣く泣く断念した。彼女は現在、滝上町に残り他業務に当たっている。一度は地域住民が望むプラットフォームが完成したかのように思われたが、わずか 2 年で消滅してしまったことに対し、住民の落胆は相当なものだったと推察する。図書館カウンターでこの夏、2 名の女性から「憩いの場ひだまり」を引き継ぐ事業を行いたいという申し出があり上司とも相談したが、公共施設で賃金を担保できない事業を行う難しさを痛感した。しかし、このことから滝上町の地域住民が気軽に集える地域コミュニティを欲しているのは明らかである。

3. 学びと地域住民の関わりから生まれるコミュニティ

(1) 先進事例から地域の「場」づくりを考える

①芝の家・ご近所ラボ新橋

11月28日、港区芝三丁目にある芝の家を訪問した。この日は子育て中のダンサーnicoさんが中心となって育児中の親子と年配女性が一緒に軽運動を行う「ちいさなからだの相談室nicoクラブ」の日で、この他にも芝の家には、40代男性が自分なりに地域に貢献したいと考えた結果、肩叩きならできると始めた「とん活部」、大学生が中心になって夜ごはんをみんなで作って食べる「よるしば」などのイベントが実施されている。この日、お茶を飲みながら様々な世代の人が和やかに会話を楽しんでいる様子を見ることができた。初めての訪問者にも気軽に声をかけられる雰囲気があり、短い時間のなかで一緒にマイムマイムを踊り、翌日のイベントに誘っていただいて、まるで芝の家の一員になったかのような楽しい時間を過ごした。

芝の家は港区芝地区総合支所と慶應義塾大学が協働で行っている“人と人がゆるやかに出会う地域交流の場”として平成20年の秋に開設された。芝の家では「お当番さん」と呼ばれるボランティアスタッフが日々の活動を支え、地域の人々がやりたいことを実現するためにほんの少しのお手伝いをし、場を整えている。平成26年に開設されたコワーキングスペースとしても活用可能なご近所ラボ新橋では、“ここから始まるご近所イノベーション”を合言葉に日替わりでマスターと呼ばれるボランティアスタッフがおり、其々がコンセプトを持ち地域や社会を良くする実験をし、地域の人々を巻き込む取り組みを行っている。

②三田の家

地域のコミュニティカフェを図書館で開設するにあたり、場を維持させるためのスタッフについて考える際、大変参考になったのが、芝の家の前身ともいえるべき三田の家である。その活動については『黒板とワイン もう一つの学び場「三田の家」』に詳しいが、この本で何かが「無いこと」で動き出す「創造的欠如」について次のように述べている。「教室、カフェ、オフィス、会議室…。通常は、どのような空間も、目的や機能、そこで期待される行動があらかじめ決められている。三田の家のように、その中心にまず『欠如』があり、その時その場に集った人たちが、結果的にその場の意味をつくるようなあり方は、例外的であるといってよい」。日替わりマスター制度はできるだけ長い時間オープンし、複数のマスターがいることで活動や集まる人の多様性を自然に広げる運営システムであると同時に、毎日イベントを行わなくても場を成り立たせる欠如のデザインであると述べている。

(2) 「本×学び」で多様な学びのニーズに応えたい

読書だけに依らない本の活用方法として、当館で実施していた本をテキストにした事業

「本の内容を体験しよう！」がある。例えば平成 28 年には『魔法のケーキ』（荻田, 2015）をテキストに、パティシエの経験がある地域住民に講師を依頼し、ケーキ講習会を実施した。みんなで 1 冊の本を囲み、その英知を享受する豊かな時間を過ごすのは 1 つの方法であろう。図書館には本の数だけ学びのテーマがあり、学びのニーズに合った本が必ずある。また、1 冊の小説などをテキストにする読書会は他者の感想に触れることで多様性に気づかされたり、相手を理解したりする機会となる。テーマごとに本を持ち寄り発表する読書会は本を選ぶためのカタログとしても機能し、本好きにはたまらないイベントとなる。また、声に出してみんなで本を読み合う朗読会は脳の広範囲な部分を使うことで、高齢者の脳の記憶機能に対して良い影響が期待できる。また、独居生活で会話が少なくなりがちな高齢者の滑舌を鍛えることにもなるのではないだろうか。^(注 2)

他方、他館での活動に目を転じると、北海道幕別町図書館では、流通業の在庫管理システムに用いられていたカメレオンコードを蔵書管理に応用し、従来の日本十進分類法に依らない知の流れを意識した棚の編集を行っている。自宅で本の置き場所に困った全国の文化人から定期的に本の寄贈を受け個人の蔵書を展示する「北の本箱」や住民協働の図書館サポーターが展示を行っている。このように、図書館の書架はフレキシブルに変更でき、頻繁に更新することで利用者に目新しさを提供することにも繋がる。図書館で地域住民が講師となってイベントを開催するとき、テーマに沿った資料を講師のセンスで集め個人選集として書架展示をすることで図書館利用者と知の交流に繋がってほしい。

滝上町の文化活動としては、現在、文化サークルが減少の一途を辿り、文化連盟の加入団体が平成元年には 28 団体あったのに対し、平成 29 年には 8 団体となってしまった。インターネットの普及により人々の興味の範囲は多岐に亘り、小規模自治体で同好の士を探し出してサークルを形成するのは難しいだろうが、このままでは文化の衰退を招きかねないと危惧する。図書館で学びの萌芽を見つけられるうちになんらかの対策を立てたい。

4. コミュニティカフェ実証実験から見える地域住民が望むコミュニティのかたちとは

(1) コミュニティカフェ実証実験の概要

人と本、人と人を繋げ、図書館で地域住民の学びあいと交流の場を創出できるか、11 月 24 日・25 日の 2 日間温かい飲み物を無料提供し、住民ニーズを把握すべくアンケート調査を行った。コーヒーを提供するだけでは集客に不安があったので、図書館利用者の若いママから希望があがった ALT による English Café と子どもの村・徳村杜紀子さんが指導する 30 年以上の歴史がある手づくりあそびの会、ソムリエ資格を持つ地域住民を講師に迎えたワイン講座 3 つの事業を実施した。いずれもテキストに本を活用したり、講座の中で蔵書の紹介を織り交ぜたりするなど本の活用を努めた。

飲み物はコーヒー、緑茶、紅茶、昆布茶を準備し、館内に飲食物を提供するための十分な設備がないので全てセルフサービスで提供した。図書館入口すぐの資料展示を撤去し、コーヒーマーカ等置いてカフェカウンターを設営した。また 2 日間限定で全館至るところで飲み物を飲めるようにし、好きな閲覧場所でコーヒーを片手に読書ができるようにした。結果、通常より滞在時間が長くなり、ゆっくり読書する姿が多く見受けられた。以前は不可能だったコミュニティカフェ



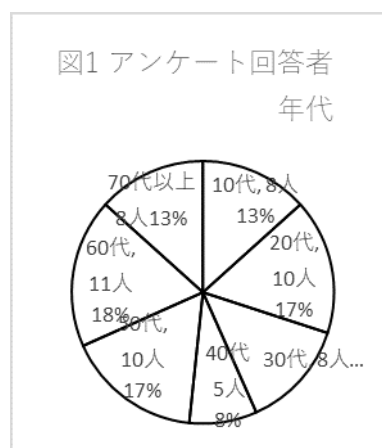
写真 コミュニティカフェ利用の様子

実証実験が可能になった背景には、滝上町で文化サークルの減少が顕著になっている危機感に加え、平成 25 年にカルチャ・コンビニエンス・クラブが指定管理者を受託した佐賀県武雄市図書館の影響が大きい。図書館にスターバックスが入り「図書館でコーヒー」という考え方が世間一般に広く認知された結果だと思われる。

2 日間の来館者数は 113 名で、うち 60 名がアンケートに協力していただいた。平成 28 年度における 1 日の平均来館者数が 38.3 名なので通常より 4 割増しの来客数となり、地域住民の関心の高さが伺える結果となった。また、普段図書館を利用していない町民も数人見受けられ、アンケート結果でも 2 名が初めて図書館を利用したと回答した。

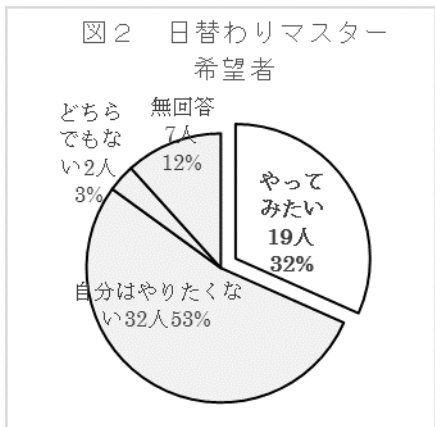
(2) コミュニティカフェ実証実験を終えて

アンケート結果を紐解くと全体の 55%が女性で、各世代万遍なくコミュニティカフェに興味を示してもらえたようである (右図参照)。これは「憩いの場ひだまり」の 2 か年の活動を通じてコミュニティカフェそのものが地域住民に浸透した結果だと推察する。この回答者のうち 59 名が図書館でコミュニティカフェを設置することに賛成であると回答した。滝上町図書館では日頃から司書がおしゃべりで子どもの声などにも寛容なので、カフェがあることによる多少の会話などもあまり気にならなかったようである。



アンケートには「閲覧場所での飲食は躊躇します」「飲食は場所を決めて、子どもが心配」という声があった。閲覧場所でコーヒーを飲めるようにしたことで滞在時間が伸びた効果もあるので、一概に場所を限定するとせっかくの効果を半減させるきらいもあるが、利用実態によって時間帯で場所を決めるなどきめ細やかな対応をする必要がある。

アンケートでは日替わりマスター制度について意見を乞う問いも設けた。日替わりマス



ターについては「来館者への情報提供や話し相手を担い、人と人を繋ぐボランティア」と説明した。その上でやってみたいか？という問いになんと 3 割以上の人が「はい」と答えた（左図参照）。この結果をこれからの社会で人と繋がりたい、そういう場を大切にしたい、そのためにできることはやってみたいという地域住民の声として受け止めるのは、あまりにも短絡的であろうか。とは言え、「町民が繋がり合うことで町に活気が出る」「コミュニティの場と交流＝豊かな心づくり」と

いう意見が行政からではなく、地域住民から発露したことにこの町の希望を感じるのである。

各事業は狭い図書館での開催のため定員が 10 名前後となり、参加を断ることもあった。参加できなかった人も 7 割近くが「興味がある」と答え、学ぶ意欲を感じる結果となった。内容についてはものづくり、おつまみ講座、子連れ英会話、編み物教室などと並行して、図書館ならではの朗読会や読書会の開催希望も散見した。希望実施日時はバラバラだったが、週末や夜間を希望するほか、今まで実施したことのない平日午後の開催を求める声想定より多く、今後は事業内容と対象者を見極め調整していきたい。

(3) 「創造的欠如」をひらくコミュニティカフェのかたちとは

コミュニティカフェが地域住民を能動的にし、良い効果が見受けられるということはわずか 2 日間の実証実験においても確認することができた。飲み物の提供方法はこれまでと同様の手法を取るが、実行するにあたりどのような「場づくり」を目指していくのか以下のとおり考察する。

① 「創造的欠如」を育むスタッフ

図書館でコミュニティカフェを始めるにあたっては、地域住民にも積極的に場づくりに参加してもらいたい。居心地の良い場を維持してくためのボランティアスタッフ制度として、芝の家の「お当番さん」、ご近所ラボ新橋の「日替りマスター」の 2 種類を応用した滝上スタイルを模索する。お当番さんは地域コミュニティに興味のある人が傾聴で利用者の思いを引き出し、人や場を繋ぐ役割を果たす。日替



資料 1 北海民友新聞記事 11 月 25 日

わりマスターは明確にやりたいことがある人が情報の収集と提供、仲間づくりを目的として場をコーディネートする。まずは「お当番さん」と「日替わりマスター」どちらも都合の良い時間帯にスタッフとして登録してもらい、カフェカウンターで自由に過ごしてもらおう。読書はもちろん、編み物をしてもいいし、ただお喋りしていてもいい。その時、その場集った人々がその場の意味を作ることができる「創造的欠如」こそが重要であり、そこから地域住民が望む活動が生まれるのだと考える。スタッフは人員配置の調整、カフェや利用者に関する情報をスタッフミーティングで共有し、共通理解を図る。カフェはセルフサービスで運営するので、図書館が開館している限り利用は可能である。スタッフの数がそれほど多くなくても場の維持はできるが、「何かやっている」「何かをやってみてほしい」という、その雰囲気は醸したいので、常時 3~10 名程度のスタッフが在籍し日替わり、週替わりで登壇する。司書も時にはお当番さん、事業の時は日替わりマスターとして機能する。スタッフ制度は、初めは滝上町の特長・希望などを盛り込んだ有機体として成長する余地を残した組織になることが望ましい。そして、その場の会話から生まれる学びの萌芽を反映させた講座、または日替わりマスターが主体となったイベントをボランティアスタッフと地域住民が中心となって実施する。



資料 2 北海道新聞記事 12 月 12 日

②連携事業について考える

団塊の世代が後期高齢者になる「2025 年問題」を目前に控え、いかに高齢者の健康寿命を延ばすかは滝上町においても喫緊の課題である。全国の図書館においても認知症に対する理解を深めるための常設コーナーを作り、カウンターで利用者の様子がおかしいと感じたら関係各所へ連絡する等の動きも出始めてきた。今回のコミュニティカフェ実証実験中、町民から高齢者に対するケアをカフェでできないか提案を受けた。滝上町でも生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）の設置を検討しているところだが、その活動の拠点としてコミュニティカフェを活用できないだろうか。脳トレや朗読会

等、気軽に参加できる事業を実施して、参加者のニーズを掴み活動に波及させることが図書館なら容易にできる。役場が閉庁している土日も開館する図書館を拠点にすることで活動の幅が広がり、効果を高めることが期待できるのである。

また、役場では子育て世代を対象にした様々な事業に取り組んでいるが、フルタイムで働き、育児や家事に忙しい親はなかなか時間を合わせる事が難しい。急に子どもが体調

を崩す場合もあり、参加したくてもできないのが実情であろう。しかし、図書館は開館中ならいつ来てもいいという敷居の低さから絵本に親しもうと来館する親子は多い。そこで来館者の親子からニーズを聞き、そのノウハウを持つ役場の各部署へ引継ぎをすることで、対象者が事業を自分ごととして捉えるようにして参加を促す方法もある。子育て世代のみならず、多世代が万遍なく利用する図書館では、来館者のニーズに呼応し様々な世代に向けた事業を各部署へ引き継ぐことが可能である。

5. おわりに

長く図書館が気軽に人の集える場になってほしいと願い続けてきたが、ここに来て実証実験を行い、地域住民のニーズを明確に把握し、地元新聞にも大きく取り上げてもらった今、コミュニティカフェは実現へ大きく舵を切ったように感じられる。大方の理解が得られれば飲み物が飲める図書館にすることはそれほど難しいことではないだろう。しかし、町民の学びたい意欲にまっすぐ向き合い、学んだ成果をまちの課題解決へと繋げるためには、そこに暮らす人々が感じたこと、考えたことを発言して行動を支援してもらえる仲間が見つかる「場」が必要である。滝上町は「学ぶ」ことにとても意欲的で役場の各部署で様々な研修会、講座を地域住民対象に開催している。ある時、まちの人がぼつりと「まちづくりの方法はたくさん学んだ。しかし、それを実現するにはどうしたらいいんだろう。」とつぶやいた。「大丈夫！図書館でみんなと一緒に考えよう！」とあの時は言えなかったが、これからはそう伝えられるコミュニティを図書館が作りたい。

《注》

注1 オルデンバーグ、レイ (2013) 『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地のよい場所」』みすず書房 P.33

注2 結城俊也 (2017) 『認知症予防におすすめ図書館利用術—フレッシュ脳の保ち方』日外アソシエーツ P.80

《参考文献》

○北室かず子 (2017) 「『知』の海へ漕ぎだそう！駅近図書館とユニーク書店主に導かれて」

○『The JR Hokkaido 通巻350号 2017年4月号』(株)北海道ジェイ・アール・エージェンシー

○熊倉敬聡／望月良一／長田進／坂倉杏介／岡原正幸／手塚千鶴子／武山政直 (2010) 『黒板とワイン もう一つの学びの場「三田の家」』慶應義塾大学出版会

○田中健夫／神山典士「新たな居場所～まち文化・交流施設」、『地域創造 通巻42号 2017年秋号』一般財団法人地域創造

○港区芝地区総合支所協働推進課地区政策担当『ご近所イノベーション学校』(パンフレット)